

俊寛

芥川龍之介

青空文庫

俊寛しゅんかん 寛かん 云いけるは……神明外しんめいほかになし。唯我等ただが一念なり。……唯仏法しゆぎようを修行しゆぎようして、今度こんど生死しやうじを出で給うべし。
源平盛衰記げんぺいせいすいき

(俊寛) いとど思いの深くなれば、かくぞ思いつづける。「見せばやな我を思わぬ友もがな磯のとまやの柴しばの庵いおりを。」

同上

一

俊寛様の話ですか？ 俊寛様の話くらい、世間に間違つて伝え

られた事は、まずほかにはありません。いや、俊寛様の話ばかりではありません。このわたし、——有王ありおう自身の事さえ、飛とんでもない嘘が伝わっているのです。現についてこの間も、ある琵琶びわ法師ほが語うしつたのを聞けば、俊寛様は御歎きの余り、岩に頭を打ちつけて、狂くるい死しをなすつてしまふし、わたしはその御死骸おなきがらを肩に身を投げて死んでしまったなどと、云っているではありませんか？ またもう一人の琵琶法師は、俊寛様はあの島の女と、夫婦の談かたらいをなすつた上、子供も大勢御出来になり、都にいらした時よりも、楽しい生しょうがい涯がいを御送りになつたとか、まことしやかに語っていました。前の琵琶法師の語つた事が、跡あと方かたもない嘘だと云う事は、この有王が生きているのでも、おわかりになるか

と思いますが、後の琵琶法師の語った事も、やはり好い加減の出たらめなのです。

一体琵琶法師などと云うものは、どれもこれも我は顔われがに、嘘ばかりついているものなのです。が、その嘘のうまい事は、わたしでも褒めずにはいられません。わたしはあの笹葺さいとぎの小屋に、俊寛様が子供たちと、御戯おたわむれになる所を聞けば、思わず微笑を浮かべましたし、またあの浪音の高い月夜に、狂い死をなさる所を聞けば、つい涙さえ落しました。たとい嘘とは云うものの、ああ云う琵琶法師びわほうしの語った嘘は、きつと琥珀こはくの中の虫のように、末までも伝わるでしょう。して見ればそう云う嘘があるだけ、わたしでも今の内ありのままに、俊寛様の事を御話しないと、琵琶法師

の嘘はいつのまにか、ほんとうに変わってしまうかも知れない——と、こうあなたはおっしゃるのですか？　なるほどそれもごもつともです。ではちようど夜長を幸い、わたしがはるばる鬼界きかいが島しまへ、俊寛様を御尋ね申した、その時の事を御話しましょう。しかしわたしは琵琶法師のように、上手にはとても話されません。ただわたしの話の取り柄えは、この有王が目のあたりまに見た、飾りのない真実と云う事だけです。ではどうかしばらくの間あいだ、御退屈でも御聞き下さい。

わたしが鬼界が島に渡つたのは、治承三年五月の末、ある曇つた午過ぎです。これは琵琶法師も語る事ですが、その日もかれこれ暮れかけた時分、わたしはやつと俊寛様に、めぐり遇う事が出来ました。しかもその場所は人氣のない海べ、——ただ灰色の浪ばかりが、砂の上に寄せては倒れる、いかにも寂しい海べだつたのです。

俊寛様のその時の御姿は、——そうです。世間に伝わっているのは、「童かとすれば年老いてその貌にあらず、法師かと思えばまた髪は空さまに生い上りて白髪多し。よろずの塵や藻屑のつきたれども打ち払わず。頸細くして腹大きに脹れ、色黒うして足手細し。人にして人に非ず。」と云うのですが、これも大抵は

作り事です。殊に頸くびが細かったの、腹が脹はれていたのと云うのは、地獄じごく変へんの画えからでも思いついたのでしょう。つまり鬼界が島と云う所から、餓鬼がきの形容を使つたのです。なるほどその時の俊寛様は、髪も延びて御出おいでになれば、色も日に焼けていらつしやいしましたが、そのほかは昔に変わらない、——いや、変わらないどころではありません。昔よりも一層いっそう丈夫じゆうそうな、頼たのもしい御姿おすがただつたのです。それが静かな潮風しおかぜに、法衣ころもの裾すそを吹かせながら、浪打なみうちぎわ際ぎわを独り御出おいでになる、——見れば御手おてには何と云うのか、笹の枝に貫いた、小さい魚を下げていらつしやいました。

「僧都そうずの御房ごぼう！ よく御無事ごむじでいらつしやいました。わたしです

！ 有王ありおうです！」

わたしは思わず駈け寄りながら、嬉しまぎれにこう叫びました。

「おお、有王か！」

俊寛様は驚いたように、わたしの顔を御覧になりました。が、もうわたしはその時には、御主人の膝を抱だいたまま、嬉し泣きに泣いていたのです。

「よく来たな。有王！ おれはもう今こんじょう生せいでは、お前にも会えぬと思つていた。」

俊寛様もしばらくの間あいだは、涙ぐんでいらつしやるようでしたが、やがてわたしを御抱き起しになると、

「泣くな。泣くな。せめては今日きょう会つただけでも、仏菩薩ぶつぼさつの御ご慈悲じひと思うが好よい。」と、親のように慰めて下さいました。

「はい、もう泣きは致しません。御房は、——御房の御住居は、この界限かいわいでございますか？」

「住居か？ 住居はあの山の陰かげじゃ。」

俊寛様は魚を下げた御手に、間近い磯山いそやまを御指しになりました。

「住居と云つても、檜肌茸ひわたぶきではないぞ。」

「はい、それは承知して居ります。何しろこんな離れ島でござい
ますから、——」

わたしはそう云いかけたなり、また涙に咽むせびそうにしました。

すると御主人は昔のように、優しい微笑を御見せになりながら、

「しかし居心いごころは悪くない住居じゃ。寢所ねどころもお前には不自由は

させぬ。では一しよに来て見るが好い。」と、気軽に案内をして下さいました。

しばらくの後のちわたしたちは、浪ばかり騒がしい海べから、寂しい漁村ぎよそんへはいりました。薄白い路の左右には、梢こずえから垂れた榕あ樹こうの枝に、肉の厚い葉が光っている、——その木の間に点々と、笹ささひらぶ葺きの屋根を並べたのが、この島の土人の家なのです。が、そう云う家の中に、赤あかあか々と竈かまどの火が見えたり、珍らしい人影が見えたりすると、とにかく村里へ来たと云う、懐なつかしい気もちだけはして来ました。

御主人は時々振り返りながら、この家にいるのは琉球りゅうきゅうじん人だとか、あの檻おりには豕いのこが飼つてあるとか、いろいろ教えて下さい

ました。しかしそれよりも嬉しかったのは、烏帽子えぼしさえかぶらない土人の男女が、俊寛様の御姿を見ると、必ず頭を下げた事です。殊に一度などはある家の前に、鶏とりを追っていた女の児さえ、御時おし宜ぎをしたではありませんか？ わたしは勿論嬉しいと同時に、不思議にも思つたものですから、何か訳のある事かと、そつと御主人うかがに伺つて見ました。

「成なりつね経つね様や康やすより頼より様が、御話しになつた所では、この島の土人おにも鬼おにのように、情なさけを知らぬ事かと存じましたが、——」

「なるほど、都にいるものには、そう思われるに相違あるまい。が、流人るにんとは云うものの、おれたちは皆都みやこ人びとじゃ。辺土へんどの民たみはいつの世にも、都人と見れば頭を下げる。業平なりひらの朝臣あそん、実さねか

方たの朝臣、——皆大同小異ではないか？ ああ云う都人もおれのように、東あづまや陸奥みちのくへ下くだつた事は、思いのほか楽しい旅だったかも知れぬ。」

「しかし実方の朝臣などは、御隠れになった後のちでさえ、都恋しさの一念から、台盤所だいばんどころの雀すずめになつたと、云い伝えて居おるではありませんか？」

「そう云う噂うわさを立てたものは、お前と同じ都人じや。鬼界きかいが島しまの土人と云えば、鬼のように思う都人じや。して見ればこれも当てにはならぬ。」

その時また一人御主人に、頭を下げた女がいました。これはちようど榕樹あじろの陰に、幼な児を抱いていたのですが、その葉うしろに後

遮さえぎられたせいか、紅染べにぞめの単衣ひとえを着た姿が、夕明りに浮んで見え
たものです。すると御主人はこの女に、優やさしい会釈えしやくを返されて
から、

「あれが少将の北きたの方かたじやぞ。」と、小声に教えて下さいました。
わたしはさすがに驚きました。

「北きたの方かたと申しますと、——成経様はあの女と、夫婦になつてい
らしたのですか？」

俊寛様は薄笑いと一しよに、ちよいと頷うなずいて御見せになりました。
た。

「抱たかいでいた児も少将の胤たねじやよ。」

「なるほど、そう伺つて見れば、こう云う辺土へんどにも似合わない、

美しい顔をして居りました。」

「何、美しい顔をしていた？　美しい顔とはどう云う顔じゃ？」

「まあ、眼の細い、頬ほおのふくらんだ、鼻の余り高くない、おっとりした顔かと思いますが、——」

「それもやはり都の好みじゃ。この島ではまず眼の大きい、頬はどこかほっそりした、鼻も人よりは心もち高い、きりりした顔が尊まれる。そのために今の女なぞも、ここでは誰も美しいとは云わぬ。」

わたしは思わず笑い出しました。

「やはり土人の悲しさには、美しいと云う事を知らないのですね。そうするとこの島の土人たちは、都の上じょうろう臍じを見せてやっても、

皆醜いと笑いますかしら？」

「いや、美しいと云う事は、この島の土人も知らぬではない。ただ好みが変わっているのじゃ。しかし好みと云うものも、万代不変とは請合われぬ。その証拠には御寺御寺の、御仏の御姿を拜むが好い。三界六道の教主、十方最勝、光明無量、三学無碍、億億衆生引導の能化、南無大慈大悲釈迦牟尼如来も、三十二相八十種好の御姿は、時代ごとにいろいろ御変りになった。御仏でももしそうとすれば、如何かこれ美人と云う事も、時代ごとにやはり違ふ筈じゃ。都でもこの後五百年か、あるいはまた一千年か、とにかくその好みの変る時には、この島の土人の女どころか、南蛮北狄の女のように、凄まじい顔が

はやるかも知れぬ。」

「まさかそんな事もありますまい。我国ぶりはいつの世にも、我国ぶりである筈ですから。」

「所がその我国ぶりも、時と場合では当てにならぬ。たとえば当世の上臈じょうろうの顔は、唐朝とうちようの御仏みほとけに活写いきうつしじや。これは都人みやこびとの顔の好みが、唐土もろこしになずんでいる証拠しょうこではないか？ すると人皇にんおう何代かの後のちには、碧眼へきがんの胡人えびすの女の顔にも、うつつをぬかす時がないとは云われぬ。」

わたしは自然とほほ笑えみしました。御主人は以前もこう云う風に、わたしたちへ御教訓なすつたのです。「変らぬのは御姿ばかりではない。御心もやはり昔のままだ。」——そう思うと何だかわた

しの耳には、遠い都の鐘の声も、通つて来るような気がしました。が、御主人は榕樹あじこうの陰に、ゆつくり御み足を運びながら、こんな事もまたおつしやるのです。

「有王。おれはこの島に渡つて以来、何が嬉しかったか知つているか？ それはあのやかましい女にようぼう房のやつに、毎日小言こごとを云われずとも、暮されるようになった事じやよ。」

三

その夜よわたしは結いゆい燈台とうだいの光に、御主人の御飯を頂きました。本来ならばそんな事は、恐れ多い次第なのですが、御主人の仰せおお

もありましたし、御給仕にはこの頃御召使いの、みつちち 兎唇の童も居
 りましたから、ごしょうばん 御招伴にあずか 預つた訳なのです。

御部屋は竹縁ちくえんをめぐらせた、僧庵そうあんとも云いたい拵こしらえです。

縁先に垂れた簾すだれの外には、前栽せんざいの竹たかむらがあるのですが、椿つばきの

油を燃やした光も、さすがにそこまでは届きません。御部屋の中

には皮籠かわごばかりか、廚子ずしもあれば机もある、——皮籠は都を御立

ちの時から、御持ちになつていたのですが、廚子や机はこの島の

土人が、不束ふつつかながらも御拵おこしらえ申した、琉球赤木りゅうきゆうあかぎとかの細

工いくだそうです。その廚子の上には経文きやうもんと一しよに、阿弥陀あみだ如

来らいの尊像そんざうが一体、端然こんじきと金色に輝いていました。これは確か康

頼すより様の、都返りの御形見おかたみだとか、伺つたように思っています。

俊寛様は円座の上に、楽々と御坐りなすつたまま、いろいろ御馳走を下さいました。勿論この島の事ですから、酢や醬油は都ほど、味が好いとは思われません。が、その御馳走の珍しい事は、汁、鱈、煮つけ、果物、——名さえ確かに知っているのは、ほとんど一つもなかつたくらいです。御主人はわたしが呆れたように、箸もつけないのを御覧になると、上機嫌に御笑いなさりながら、こう御勧め下さいました。

「どうじゃ、その汁の味は？　それはこの島の名産の、臭梧桐と云う物じゃぞ。こちらの魚も食うて見るが好い。これも名産の永良部鰻じゃ。あの皿にある白地鳥、——そうそう、あの焼き肉じゃ。——それも都などでは見た事もあるまい。白地鳥と云う

物は、背の青い、腹の白い、形は鶴ことうにそっくりの鳥じゃ。この島の土人はあの肉を食うと、湿気しつきを払うとか称とえている。その芋いもも存外味は好よいぞ。名前か？ 名前は琉球芋りゅうきゅういもじゃ。梶王かじおうなどは飯の代りに、毎日その芋を食うている。」

梶王と云うのはさつき申した、兎唇みつくちの童わらべの名前なのです。

「それでも勝手に箸はしをつけてくれい。粥かゆばかり啜すすつていさえすれば、

得脱とくだつするようには、沙門ふりようけんにあり勝ちの不量見ふりようけんじゃ。

世尊せそんさえ成道じようどうされる時には、牧牛ぼくぎゆうの女難陀婆羅むすめなんだばらの、

乳糜にゆうびの供養くようを受けられたではないか？ もしあの時空腹のまま、

畢波羅樹下ひつぱらじゆかに坐まつていられたら、第六天の魔王波旬はじゆんは、三人の

魔女なぞを遣つかすよりも、六牙象王ろくげのぞうおうの味噌漬みそづけだの、天竜てんりゆうは

八部ちちぶの粕漬かすづけだの、天竺てんじくの珍珠しんじゆを降ふらせたかも知らぬ。もつとも食く足いたれば淫いんを思おもうのは、我々凡夫ぼんぷの慣ならいじやから、乳糜にちを食くわれた世尊せそんの前まへへ、三人の魔女まじよを送おくつたのは、波旬はじんも天あつ晴は見れ上あげた才子さいしじや。が、魔王まわうの浅間あさましさには、その乳糜にちを献けんじたものが、女人にょにんじやと云いう事を忘わすれて居ゐつた。牧牛ぼくぎうの女難陀婆羅にょなんだばら、世尊せそんに乳糜にちを献けんじ奉ほうる、——世尊せそんが無上むじやうの道みちへ入いられるには、雪せつぎ山さん六年ろくにんの苦行くぎやうよりも、これが遥とほかに大事だいじだつたのじや。『取かのにゆ彼かうをとりいのごとくほうしよくし
乳糜にち如に意い飽ほう食よく、悉しつ皆かい淨じやう尽じんす。』——仏ぶつ本ほん行ぎやうき

經きやう七卷しちくわんの中ちゆうにも、あれほど難ありがた有あい所しよは沢山たくさんあるまい。——

『爾そのとき時ば菩さつ薩び食を糜しよく已す訖で從におわ座りて而ぎ起より。安あん庠じ漸じやう々ぜん向あん菩じ提じやう樹ぜん。』どうじや。『安あん庠じ漸じやう々ぜん向あん菩じ提じやう樹ぜん。』女に

よにん
人を見、乳糜に飽あかれた、端たん巖ごん微み妙ようの世尊の御姿が、目まの
あたりに拝おがまれるようではないか？」

俊寛様は楽しそうに、晩の御飯をおしまいになると、今度は涼
しい竹縁ちくえんの近くへ、円座わろうだを御移しになりながら、

「では空腹が直つたら、都みやこの便りでも聞かせて貰おう。」とわた
しの話おウながを御促おウながしになりました。

わたしは思わず眼を伏せました。兼ねて覚悟はしていたものの、
いざ申し上げるとなつて見ると、今更のように心が怯おクれたのです。
しかし御主人は無頓着に、芭蕉ばしやうの葉の扇おうぎを御手にしたまま、も
う一度御催ごさい促そくなさいました。

「どうじゃ、女房は相あい不かわ変らす小言こごとばかり云つてゐるか？」

わたしはやむを得ず俯向うつむいたなり、御留守おるすの間にあいだ出しゅつ来たいした、
 いろいろの大変を御話しました。御主人が御捕おとらわれなすつた後のち、
ごきんじゆ御近習は皆逃げ去つた事、京きやう極ごくの御屋形おやかたや鹿ヶ谷ししの御山莊たに、
 も、平家へいけの侍に奪うばわれた事、北きたの方は去年かたの冬、御隠かくれになつて
 しまつた事、若君も重い疱瘡もがさのために、その跡を御追おいなすつた
 事、今ではあなたの御家族の中でも、たつた一人姫ひめ君ぎみだけが、
なら奈良の伯母おば御前ごぜの御住居おすまいに、人目を忍しのんでいらつしやる事、――
 そう云う御話をしてゐる内に、わたしの眼にはいつのまにか、燈
ほかげ台の火影が曇くもつて来きました。軒先すだれの簾ずし、廚子くしの上の御仏みほとけ、――
 それももうどうしたかわかりません。わたしはどうとう御話な半なかば
 に、その場へ泣なき沈しんでしまいました。御主人は始終もくねん黙然もくねんと、

御耳を傾けていらしたようです。が、姫君の事を御聞きになると、突然さも御心配そうに、法衣ころもの膝を御寄せになりました。

「姫はどうじゃ？ 伯母御前にはようなついているか？」

「はい。御睦おむつましいように存じました。」

わたしは泣く泣く俊寛様へ、姫君の御消息ごしようそくをさし上げました。それはこの島へ渡るものには、門司もじや赤間あかまが関せきを船出する時、やかましい詮議せんぎがあるそうですから、髻もとどりに隠して来た御文おふみなのです。御主人は早速さつそく燈台の光に、御消息をおひろげなさりながら、ところどころ小声に御読みになりました。

「……世の中かきくらしして晴るる心地なく侍りはべ。……さても三人みたり一つ島に流されけるに、……などや御身おんみ一人残り止まり給うらん

と、……都には草のゆかりも枯れはてて、……当時は奈良の伯母御前の御許おんもとに侍り。……おろそかなるべき事にはあらねど、かすかなる住居すまい推し量りはか給え。……さてもこの三とせまで、いかに御心みこころ強く、有とも無とも承わらざるらん。……とくとく御上おんのほり候え。恋しとも恋し。ゆかしともゆかし。……あなかしこ、あなかしこ。……」

俊寛様は御文を御置きになると、じつと腕組みをなすつたまま、大きい息をおつきになりました。

「姫はもう十二になった筈じやな。——おれも都には未練みれんはないが、姫にだけは一目会いたい。」

わたしは御心中ごしんちゆうを思いやりながら、ただ涙ばかり拭ぬぐつていま

した。

「しかし会えぬものならば、——泣くな。有王^{ありおう}。いや、泣きたければ泣いても好い^よ。しかしこの娑婆^{しゃば}世界には、一々泣いては泣き尽せぬほど、悲しい事が沢山あるぞ。」

御主人は後の黒木の柱に、ゆっくり背中を御寄せになつてから、寂し^{うしろ}そうに御微笑なさいました。

「女房^{にようぼう}も死ぬ。若^{わか}も死ぬ。姫には一生会えぬかも知れぬ。屋^や形^{かた}や山荘もおれの物ではない。おれは独り離れ島に老の来るのを待つている。——これがおれの今のさまじや。が、この苦^{くげん}難^{なん}を受^うけているのは、何もおれ一人に限つた事ではない。おれ一人衆^{しゅう}苦^くの大海に、没^{ぼつざい}在^{ざい}していると考えるのは、仏弟子^{ぶつでし}にも似合わ

ぬ増長慢ぞうじようまんじや。『増長驕慢ぞうじようきようまん、尚非世俗なおせぞくびやく白衣えのよろしきと

所宜ころにあらず。』艱難かんなんの多いのに誇る心も、やはり邪業じやごうには違ちがい

あるまい。その心さえ除はずいてしまえば、この粟散ぞくさん辺土へんどの中うちにも、

おれほどの苦を受けているものは、恒河沙ごうがしやの数かずより多いかも知

れぬ。いや、人界にんがいに生れ出たものは、たといこの島に流されず

とも、皆おれと同じように、孤独たんの歎たんを洩もらしているのじや。村む

上らかみの御門みかど第七の王子にほんなかつかさしんのう、二品中務親王にほんなかつかさしんのう、六代こういんの後胤こういん、仁和にん

寺なじの法印ほういん寛雅かんがが子こ、京極きやうごくの源大納言みなもとのだいながん雅俊まさとし卿きやうの孫まご

に生れたのは、こう云う俊寛しゆんかん一人ひとりじやが、天あめが下したには千の俊

寛、万の俊寛、十万の俊寛、百億の俊寛が流ながれているぞ。――

俊寛様はこうおつしやると、たちまちまた御眼おんめのどこかに、陽

気な御気色みけしきひらめが閃ひらめきました。

「一条二条の大路おおじの辻つじに、盲人めくらが一人さまようているのは、世にも憐あわれに見えるかも知れぬ。が、広い洛中らくちゆうらくがい洛外らくがい、無量無数の盲人めくらどもに、充ち満ちた所を眺めたら、——有王ありおう。お前はどうかすると思う？ おれならばまつ先にふき出してしまふぞ。おれの島流しまりゅうしも同じ事ことじゃ。十方じつぽうに遍満へんまんした俊寛しゅんかんどもが、皆ただ一人流ひとりりゅうされたように、泣きつ喚わめきつしていると思えば、涙なみだの中うちにも笑わらわずにはいられぬ。有王ありおう。三界さんがい一心いっしんと知しつた上うへは、何なによりもまず笑わらう事を学まなべ。笑わらう事を学まなぶためには、まず増長慢ぞうじやうまんを捨すてねばならぬ。世尊せそんの御出世ごしゅつせいは我々衆生しゆじやうに、笑わらう事を教おしえに來きられたのじゃ。大般涅槃だいぱんねはんの御時おんときにさえ、摩訶伽葉まかかしやうは笑わらつた

ではないか？」

その時はわたしもいつのまにか、頬ほおの上に涙が乾いていました。すると御主人は簾すだれ越しに、遠い星空を御覧になりながら、

「お前が都へ帰ったら、姫にも歎きをするよりは、笑う事を学べと云つてくれい。」と、何事もないうちにおつしやるのです。

「わたしは都へは帰りません。」

もう一度わたしの眼の中には、新たに涙が浮んで来ました。今度はそう云う御言葉を、御恨おうらみに思つた涙なのです。

「わたしは都にいた時の通り、御側おそば勤めをするつもりです。年とつた一人の母さえ捨て、兄弟にも仔細しさいは話さずに、はるばるこの島へ渡つて来たのは、そのためばかりではありませんか？ わ

たしはそうおつしやられるほど、命が惜いように見えるでしょうか？ わたしはそれほど恩義を知らぬ、人非人にんぴにんのように見えるでしょうか？ わたしはそれほど、――」

「それほど愚かとは思わなかった。」

御主人はまた前のように、にこにこ御笑いになりました。

「お前がこの島に止とどまっていれば、姫の安否あんぴを知らせるのは、誰

がほかに勤めるのじゃ？ おれは一人でも不自由はせぬ。まして

梶王かじおうと云う童わらわべがいる。――と云つてもまさか妬ねたみなどはすまい

な？ あれは便りのないみなし児こじゃ。幼い島流しの俊寛しゅんかんじゃ。

お前は便船べんせんのあり次第さつそく、早速都へ帰るが好よい。その代り今夜は

姫への土産みやげに、おれの島住しまぢいがどんなだったか、それをお前に話

して聞かそう。またお前は泣いているな？ よしよし、ではやはり泣きながら、おれの話聞いてくれい。おれは独り笑いながら、勝手に話を続けるだけじゃ。」

俊寛様は悠々と、芭蕉扇ばしやうせんを御使いなさりながら、島住居しまずまいの御話をなさり始めました。軒先のきさきに垂れた簾すだれの上には、ともし火の光を尋ねて来たのでしよう、かすかに虫の這はう音が聞えています。わたしは頭を垂れたまま、じつと御話に伺い入りました。

四

「おれがこの島へ流されたのは、治承じしやう元年七月の始じや。おれ

は一度も成親なりちかの卿きょうと、天下なぞを計った覚えはない。それが西にしはちじよう八条へ籠こめられた後のち、いきなり、この島へ流されたのじやから、始はおれも忌々いまいましさの余り、飯を食う気さえ起らなかつた。

「しかし都の噂うわさでは、——」

わたしは御言葉ごごころを遮さへぎりました。

「僧都そうずの御房ごぼうも宗人むねとの一人に、おなりになつたとか云う事ですが、

「それはそう思うに違いない。成親の卿さえ宗人の一人に、おれを数えていたそうじやから、——しかしおれは宗人ではない。浄じ海うかい入道にゆうどうの天下が好よいか、成親の卿の天下が好よいか、それさ

えおれにはわからぬほどじゃ。事によると成親の卿は、浄海入道よりひがんでいるだけ、天下の政治には不向きかも知れぬ。おれはただ平家の天下は、ないに若かぬと云つただけじゃ。源平藤橘、どの天下も結局あるのではないに若かぬ。この島の土人を見るが好い。平家の代でも源氏の代でも、同じように芋を食うては、同じように子を生んでいる。天下の役人は役人がいぬと、天下も亡ぶように思っているが、それは役人のうぬ惚れだけじゃ。」

「が僧都の御房の天下になれば、何御不足にもありますまい。」

俊寛様の御眼の中には、わたしの微笑が映つたように、やはり御微笑が浮びました。

「成親の卿の天下同様、平家の天下より悪いかも知れぬ。何故

と云えば俊寛は、じょうかいにゆうどう浄海入道より物わかりが好よい。物わかりが好ければ政治なぞには、夢中になれぬ筈ではないか？
くちよく わきま曲直も弁えずに、とほう途方もない夢ばかり見続けている、——そこたかへいだが高平太の強い所じや。こまつ小松の内府なぞは利巧なだけに、天下を料理するとなれば、浄海入道より数段下じや。内府も始終病身じやと云うが、平家一門のためを計はかれば、一日も早く死んだが好よい。その上またおれにしても、じきしき食色の二性を離れぬ事は、浄海入道と似たようなものじや。そう云うほんぶ凡夫の取った天下は、やはり衆しゅじょう生のためにはならぬ。しよせん所詮人界が浄土になるには、みほとけ おんてんか御仏の御天下を待つほかはあるまい。——おれはそう思っていたから、天下を計る心なぞは、みじん微塵も貯えてはいなかった。」

「しかしあの頃は毎夜のように、なかみかどたかくら中御門高倉のだいなごんさま大納言様へ、御通いなすつたではありませんか？」

わたしは御不用意を責めるように、俊寛様の御顔を眺めました、ほんとうに当時の御主人は、きたかた北の方の御心配も御存知ないのか、夜はきやうごく京極の御屋形にも、めつた滅多に御休みではなかつたのです。しかし御主人はあいかわらず不相変、澄ました御顔をなすつたまま、ばしやう芭蕉扇せんを使つていらつしやいました。

「そこが凡夫の浅ましきじや。ちやうどあの頃あの屋形には、つる鶴の前まえと云う上うえ童わらわがあつた。これがいかなる天魔の化身けしんか、おれを捉とらえて離さぬのじや。おれの一生の不仕合わせは、皆あの女がいたばかりに、降ふつて湧いたと云うても好よい。女房に横よこ面つらを

打たれたのも、鹿ヶ谷ししたにの山荘を仮かしたのも、しまいにこの島へ流
 されたのも、——しかし有ありおう王、喜んでくれい。おれは鶴の前に
 夢中になつても、謀叛むほんの宗人むねとにはならなかつた。女にょにん人に愛樂を
 生じたためしは、古今の聖者にも稀まれではない。大幻術の摩登伽まとうぎやに
 女よには、阿難尊者あなんそんじやさえ迷わせられた。竜樹菩薩りゆうじゆぼさつも在俗の
 時には、王宮の美人を偷ぬすむために、隱おんぎよう形の術を修せられたそ
 うじや。しかし謀叛人になつた聖者は、天竺震旦てんじくしんたん本朝を問わ
 ず、ただの一人もあつた事は聞かぬ。これは聞かぬのも不思議は
 ない。女にょにん人に愛樂を生ずるのは、五根ごこんの欲を放つだけの事じや。
 が、謀叛むほんを企てるには、貪嗔癡どんしんちの三毒を具えねばならぬ。聖者
 は五欲を放たれても、三毒の害は受けられぬのじや。して見れば

おれの知慧ちえの光も、五欲のために曇つたと云え、消えはしなかつたと云わねばなるまい。——が、それはともかくも、おれはこの島へ渡つた当座、毎日忌々いまいましい思いをしていた。」

「それはさぞかし御難儀ごなんぎだつたでしょう。御食事は勿論、御召し物さえ、御不自由勝ちに違いありませんから。」

「いや、衣食は春秋はるあき二度ずつ、肥前ひぜんの国鹿瀬かせの荘から、少将のもとへ送つて来た。鹿瀬の荘は少将しゆうたうの舅いとこ、平のりもりの教盛のりもりの所領の地じゃ。その上おれは一年ほどたつと、この島の風土にも慣れてしまつた。が、忌々いまいましさを忘れるには、一しよに流された相手が悪わるい。丹波たんばの少将成経なりつねなどは、ふさいでいなければ居睡いねむりをしていた。」

「成経様は御年若でもあり、父君の御不運を御思いになつては、御歎きなさるのもごもつともです。」

「何、少将はおれと同様、天下はどうなつてもかまわぬ男じや。あの男は琵琶でも掻き鳴らしたり、桜の花でも眺めたり、上臈に恋歌でもつけていれば、それが極楽じやと思つてゐる。」

じやからおれに会いさえすれば、謀叛人の父ばかり怨んでいた。「しかし康頼様は僧都の御房と、御親しいように伺いましたが。」

「ところがこれが難物なのじや。康頼は何でも願さえかければ、天神地神諸仏菩薩、ことごとくあの男の云うなり次第に、利益を垂れると思つてゐる。つまり康頼の考えでは、神仏も商人と

同じなのじゃ。ただ神仏は商人のように、金銭では冥護みょうごを御売りにならぬ。じゃから祭文さいもんを読む。香火そなを供える。この後の山なぞには、姿の好よい松が沢山あつたが、皆康頼に伐きられてしまった。伐つて何にするかと思えば、千本の卒塔婆そとばを拵こしらえた上、一々それに歌を書いては、海の中へ抛ほうりこむのじゃ。おれはまだ康頼くらい、現金な男は見た事がない。」

「それでも莫迦ぼかにはなりません。都の噂ではその卒塔婆が、熊野くまのにも一本、巖いづくしま島にも一本、流れ寄つたとか申していました。」

「千本の中には一本や二本、日本にほんの土地へも着きそうなものじゃ。ほんとうに冥護みょうごを信ずるならば、たつた一本流すが好よい。その上康頼は難ありがた有がたそうに、千本の卒塔婆そとばを流す時でも、始終風向き

を考へていたぞ。いつかおれはあの男が、海へ卒塔婆を流す時に、
 歸命頂きみやうちょうらい礼らい熊野くまの三所さんしよの権現ごんげん、分けては日吉ひよし山王さんおう、王子おうじの
 眷属けんぞく、総じては上かみは梵天ぼんてん帝釈たいしやく、下しもは堅牢けんろう地神じしん、殊なには内
 海外海いかいげかい竜神りゆうじん八部はちぶ、応護おうごの毗まなじりを垂たれさせ給たまえと唱となえたから、
 その跡あとへ並びなに西風にしかぜ大明神だいみょうじん、黒潮くろしお権現ごんげんも守らせ給たまえ、
 謹上きんじょう再拜さいはいとつけてやつた。」

「悪い御冗談ごじょうだんをなさいます。」

わたしもさすがに笑い出しました。

「すると康頼やすよりは怒おこったぞ。ああ云いう大嗔恚だいしんいを起おこすようでは、
 現世利益げんぜりやくはともかくも、後生ごしやう往生おうじやうは覚束おぼつかないものじゃ。――

――が、その内に困こまった事ことには、少将しょうしょうもいつか康頼やすよりと一ひとしよに、

神信心を始めたではないか？ それも熊野くまのとか王子おうじとか、由緒ゆいしよ

のある神を拝むのではない。この島の火山には鎮護ちんごのためか、岩い

殿どのと云う祠ほこらがある。その岩殿へ詣でるのじや。——火山と云え

ば思い出したが、お前はまだ火山を見た事はあるまい？」

「はい、たださつき榕樹あこう こすえの梢えに、薄赤い煙のたなびいた、禿はげ山

の姿を眺めただけです。」

「では明日あすでもおれと一しよに、頂へ登つて見るが好よい。頂へ行

けばこの島ばかりか、大海の景色は手にとるようじや。岩殿の祠

も途中にある、——その岩殿へ詣でるのに、康頼はおれにも行け

と云うたが、おれは容易よういには行こうとは云わぬ。」

「都では僧都そうずの御房ごぼう一人、そう云う神詣でもなさらないために、

御残されになつたと申して居ります。」

「いや、それはそうかも知れぬ。」

俊寛様は真面目まじめそうに、ちよいと御首を御振りになりました。

「もし岩殿に霊があれば、俊寛一人を残したまま、二人の都返りを取り持つくらいは、何とも思わぬ禍津神まがつがみじゃ。お前はさつきおれが教えた、少将の女房を覚えているか？ あの女もやはり岩

殿へ、少将がこの島を去らぬように、毎日毎夜詣でたものじゃ。

所がその願がんは少しも通らぬ。すると岩殿と云う神は、天魔にも増した横道者おうどうものじゃ。天魔には世尊御出世せそんごしゅつせいの時から、諸悪を行う

と云う戒行かいぎようがある。もし岩殿の神の代りに、天魔がああ祠に

いるとすれば、少将は都へ帰る途中、船から落ちるか、熱病にな

るか、とにかくに死んだのに相違ない。これが少将もあの女も、同時に破滅させる唯一の途みちじや。が、岩殿は人間のようにならば、岩殿には限らぬ。奥州名取郡笠島の道祖は、都かの加茂河が原わらの西、一条の北の辺ほとりに住ませられる、出雲路いずもじの道祖さえの御娘おんむすめじや。が、この神は父の神が、まだむこ賀の神も探されぬ内に、若い都あきゆうどの商人いもせと妹背ちぎりの契を結んだ上、さつさと奥へ落ちて来られた。こうなつては凡夫も同じではないか？ あの実さね方かたの中將は、この神の前を通られる時、下馬げばもはい拜もされなかつたばかりに、とうとう蹴殺けころされておしまいなすつた。こう云う人間に近い神は、五塵を離れていぬのじやから、何を仕出かすか油断はならぬ。こ

のためしでもわかる通り、一体神と云うものは、人間離れをせぬ限り、あが崇めろと云えた義理ではない。——が、そんな事は話の枝え葉だじや。やすより康頼と少将とは一心に、岩殿詣でを続け出した。それも岩殿を熊野くまのになぞらえ、あの浦は和歌浦わかのうら、この坂は蕪坂かぶらぎかなぞと、一々名をつけてやるのじやから、まず童たちが鹿狩ししがりと云つては、小犬を追いまわすのも同じ事じや。ただ音無おとなしの滝たきだけは本物よりもずっと大きかった。」

「それでも都の噂では、奇瑞きずいがあつたとか申していますが。」

「その奇瑞の一つはこうじや。結願けちがんの当日岩殿の前に、二人がほっせ法施たむを手向むけていると、山風が木々を煽あおった拍子ひょうしに、椿つばきの葉が二枚こぼれて来た。その椿の葉には二枚とも、虫の食った跡あとが残

っている。それが一つには帰雁きがんとあり、一つには二とあつたそう
 じゃ。合せて読めば帰雁二となる、——こんな事が嬉しいのか、
 康頼は翌日得々とくとくと、おれにもその葉を見せなぞした。成程二と
 は読めぬでもない。が、帰雁きがんはいかにも無理じゃ。おれは余り可
 笑かしかつたから、次の日山へ行つた歸りに、椿の葉を何枚も拾つ
 て来てやつた。その葉の虫食いを續けて読めば、帰雁二どころの
 騒さわぎではない。『明日みょうにち歸洛きらく』と云うのもある。『清盛横死きよもりおうし』
 と云うのもある。『康頼 往生おうじょう』と云うのもある。おれはさぞ
 かし康頼も、喜ぶじやろうと思うたが、——」

「それは御立腹なすつたでしょう。」

「康頼は怒るのに妙を得ている。舞まいも洛中に並びないが、腹を立

てるのは一段と巧者じゃ。あの男は謀叛むほんなぞに加わつたのも、嗔しん恚いに牽ひかれたのに相違ちがない。その嗔恚しんいの源みなもとはと云えば、やはり増ぞうじょうまん
長慢ちやうまんのなせる業わざじゃ。平家へいけは高平たかへい太以下皆悪人、こちらは
大納言だいなごん以下皆善人、——康頼かやうはこう思おもうている。そのうぬ惚ぼれ
がためにならぬ。またさつきも云うた通り、我々凡夫ぼんぷは誰も彼も、
皆高平太と同様なのじゃ。が、康頼かやうの腹はらを立てるのが好よいか、少
将しょうのため息いきをするのが好よいか、どちらが好よいかはおれにもわから
ぬ。」

「成経なりつね様御一人さまごひとりだけは、御妻子ごしよこもあつたそうですから、御紛まぎれ
になる事こともありましたろうに。」

「ところが始終しじう蒼あはい顔かほをしては、つまらぬ愚痴ぐちばかりこぼしてい

た。たとえば谷間の椿を見ると、この島には桜も咲かないと云う。火山の頂の煙を見ると、この島には青い山もないと云う。何でもそこにある物は云わずに、ない物だけ並べ立てているのじや。一度などはおれと一しよに、磯山へ橐吾を摘みに行ったら、ああ、わたしはどうすれば好いのか、ここには加茂川の流れもないと云うた。おれがあの時吹き出さなかつたのは、我立つ杣の地主権現、日吉の御冥護に違いない。が、おれは莫迦莫迦しかつたから、ここには福原の獄もない、平相国入道浄海もない、難有い難有いところ云うた。」

「そんな事をおっしゃつては、いくら少将でも御腹立ちになりましたろう。」

「いや、怒おこられれば本望じゃ。が、少将はおれの顔を見ると、悲しそうに首を振りながら、あなたには何もおわかりにならない、あなたは仕合せな方かたですと云うた。ああ云う返答は、怒られるよりも難儀じゃ。おれは、——実はおれもその時だけは、妙に気が沈んでしもうた。もし少将の云うように、何もわからぬおれじゃつたら、気も沈まずにすんだかも知れぬ。しかしおれにはわかつているのじゃ。おれも一時は少将のように、眼の中の涙を誇ったことがある。その涙に透すかして見れば、あの死んだ女にようぼう房も、どのくらい美しい女に見えたか、——おれはそんな事を考えると、急に少将が気の毒になった。が、気の毒になって見ても、可笑おかしいものは可笑しいではないか？　そこでおれは笑いながら、言葉

だけは真面目まじめに慰めようとした。おれが少将に怒られたのは、跡にも先にもあの時だけじゃ。少将はおれが慰めてやると、急に恐しい顔をしながら、嘘をおつきなさい。わたしはあなたに慰められるよりも、笑われる方が本望ですと云うた。その途端とたんに、——妙ではないか？　とうとうおれは吹き出してしもうた。」

「少将はどうかさいました？」

「四五日の間はおれに遇おうても、挨拶あいさつさえ碌ろくにしなかつた。が、その後のちまた遇うたら、悲しそうに首を振つては、ああ、都へ返りたい、ここには牛車ぎっしゃも通らないと云うた。あの男こそおれより仕合せものじゃ。——が、少将や康頼やすよりでも、やはり居らぬよりは、いた方が好よい。二人に都へ歸られた当座、おれはまた二年ぶ

りに、毎日寂しゆうてならなかつた。」

「都の噂うわさでは御寂しいどころか、御歎なげき死じにもなさり兼ねない、
御容ごようす子こだつたとか申していました。」

わたしは出来るだけ細こま々と、その御噂を御話しました。琵琶びわ
法師ほうしの語る言葉を借りれば、

「天に仰あぎ地に俯ふし、悲しみ給えどかいぞなき。……猶なおも船ともの纜な
に取りつき、腰になり脇になり、丈たけの及ぶほどは、引かれておわ
しけるが、丈も及ばぬほどにもなりしかば、また空むなしき渚なぎさに泳なぎ
返り、……是具これぐして行けや、我われ乗せて行けやとて、おめき叫なび給
えども、漕こぎ行く船のならいにて、跡は白浪しらなみばかりなり。」と
云う、御狂乱ごきやうらんの一段を御話したのです。俊寛様は御珍めづしそうに、

その話を聞いていらつしやいましたが、まだ船の見える間は、手招ぎまねをなすつていらつしたと云う、今では名高い御話をするてまねと、
 「それは満更嘘まんざらではない。何度もおれは手招ぎてまねをした。」と、
 素直すなおに御領おうなずきなさいました。

「では都の噂通り、あの松浦まつらの佐用姫さよひめのように、御別れを御惜しみなすつたのですか？」

「二年の間同じ島に、話し合つた友だちと別れるのじや。別れを惜しむのは当然ではないか？　しかし何度も手招ぎをしたのは、別れを惜しんだばかりではない。——一体あの時おれの所へ、船のはいつたのを知らせたのは、この島にいる琉球りゅうきゅうじん人じや。それが浜べから飛んで来ると、息も切れ切れに船々と云う。船は

まずわかつたものの、何の船がはいつて来たのか、そのほかの言
 葉はさつぱりわからぬ。あれはあの男もうろたえた余り、日本語
 と琉球語とを交る交る、かわがわ 饒舌しやべつていたのに違いあるまい。おれは
 ともかくも船と云うから、早速浜べへ出かけて見た。すると浜べ
 にはいつのまにか、土人が大勢集おおぜいつている。その上に高い帆ほぼし
 柱しらのあるのが、云うまでもない迎いの船じゃ。おれもその船を
 見た時には、さすがに心が躍おどるような気がした。少将や康頼やすよりは
 おれより先に、もう船の側へ駈けつけていたが、この喜びようも
 一通りではない。現にあの琉球人などは、二人とも毒蛇どくじゃに噛かま
 れた揚句あげく、気が狂ったのかと思うくらいじゃ。その内に六波羅ろくはら
 から使に立った、丹左衛門尉基安たんのさえもんのかしやうもとやすは、少将に赦免しやめんの教書

を渡した。が、少将の読むのを聞けば、おれの名前がはいつていない。おれだけは赦免にならぬのじや。——そう思つたおれの心の中には、わずか一弾指の間じやが、いろいろの事が浮んで来た。姫や若の顔、女房の罵る声、京極の屋形の庭の景色、天竺の早利即利兄弟、震旦の一行阿闍梨、本朝の実方たの朝臣あそん、——とても一々数えてはいられぬ。ただ今でも可笑おかしいのは、その中にふと車を引いた、赤牛あかうしの尻が見えた事じや。しかしおれは一心に、騒さわがぬ容ようす子をつくつていた。勿論少将や康頼は、氣の毒そうにおれを慰めたり、俊寛も一しよに乗せてくれいと、使にも頼んだりしていたようじや。が、赦免くくだの下らぬものは、何をどうしても、船へは乗れぬ。おれは不動心を振り起しな

がら、何故なげおれ一人赦免しやめんに洩もれたか、その訳をいろいろ考えて見
 た。高平たかへい太はおれを憎にくんでいる。——それも確かには違ちがいない。
 しかし高平太は憎にくむばかりか、内心おれを恐おそれている。おれは前まへ
 の法勝寺ほつしょうじの執しゆぎ行ぎやうじゃ。兵へいじ仗じやうの道は知る筈はずがない。が、
 天下は思おもいのほか、おれの議論ぎろんに応おこずるかも知れぬ。——高平太
 はそこを恐おそれているのじゃ。おれはこう考えたら、苦く笑しょうせず
 はいられなかつた。山門さんもんや源氏げんじの侍さむらいどもに、都合つごうの好いい議論ぎろんを拵こしら
 えるのは、西光さいこう法師ほうしなどの嵌はまり役やくじゃ。おれは眇びやうたる一平家へいけに、
 心を勞あはするほど老耄おいほれはせぬ。さつきもお前に云いうた通り、天下
 は誰たれでも取とっているが好いい。おれは一卷きやうもんの經きやうもん文ぶんのほか、鶴つる
 の前まへでもいまえれば安堵あんどしている。しかし淨じやう海かい入い道どうになると、

浅学短才の悲しさに、俊寛も無気味ぶきみに思っているのじゃ。して見れば首でも刎はねられる代りに、この島に一人残されるのは、まだ仕合せの内かも知れぬ。——そんな事を思っている間あいだに、いよいよ船出と云う時になった。すると少将の妻になった女が、あの赤児を抱いたまま、どうかその船に乗せてくれいと云う。おれは氣の毒に思うたから、女は咎とがめるにも及ぶまいと、使もとの基安やすに頼んでやった。が、基安は取り合いもせぬ。あの男は勿論役目のほかは、何一つ知らぬ木偶でくの坊じゃ。おれもあの男は咎めずとも好いい。ただ罪の深いのは少将じゃ。——」

俊寛様は御腹立たしそうに、ばたばた芭蕉扇ばしやうせんを御使いなさいました。

「あの女は氣違ひのように、何でも船へ乗ろうとする。舟子たちはそれを乗せまいとする。とうとうしまいにあの女は、少将の直たたれすその裾つかを掴んだ。すると少将は蒼あおい顔をしたまま、邪じゃ慳けんにその手をは刎ねのけたではないか？ 女は浜べに倒れたが、それぎり二度と乗ろうともせぬ。ただおいおい泣くばかりじゃ。おれはあの一瞬間、康やす頼よりにも負けぬ大だい嗔しん恚いを起した。少将は人畜じんちくしよ生うじゃ。康頼もそれを見ているのは、仏弟子ぶつでしの所業しよぎようとも思われぬ。おまけにあの女を乗せる事は、おれのほかに誰も頼まなかつた。——おれはそう思うたら、今でも不思議な氣がするくらい、ありとあらゆる罵ばり詈ぎん譏ぼうが、口を衝ついて溢あふれて来た。もつともおれの使つたのは、京童きようわらべの云う悪あつ口こうではない。八万はちまんほう

法蔵どう 十二部經じゅうにぶきょうちゆう 中の悪鬼羅刹あくきらせつの名前ばかり、矢つぎ早に浴びせたのじゃ。が、船は見る見る遠ざかってしまふ。あの女はやはり泣き伏したままじゃ。おれは浜べにじだんだを踏ふみながら、返せ返せと手招てまねぎをした。」

御主人の御腹立ちにも関かかわらず、わたしは御話を伺っている内に、自然とほほ笑えんでしまいました。すると御主人も御笑いになりながら、

「その手招てまねぎが伝わっているのじゃ。嗔恚たの祟たりはそこにもある。あの時おれが怒おこりさえせねば、俊寛は都へ帰りたさに、狂いまわつたなぞと云う事も、口くちの端はへ上のらずにすんだかも知れぬ。」と、仕方がなさそうにおつしやるのです。

「しかしその後はのち格別かくべつに、御歎ごきなさる事はなかつたのですか？」

「歎なげいても仕方はないではないか？ その上うえ時のたつ内には、寂ひんしさも次第に消えて行つた。おれは今では己身こしんの中うちに、本ほん仏ぶつを見るより望みはない。自土じど即浄土そくじょうどと観くわんじさえすれば、大だい歡喜かんぎの笑い声も、火山ほのから炎ほの迸ぼぼるばしのように、自然じぜんと湧わいて来なければならぬ。おれはどこまでも自力じりきの信者しんじゃ。——おお、まだ一つ忘れていた。あの女は泣き伏ふしたぎり、いつまでたつても動うごこうとせぬ。その内に土人も散まじてしまふ。船は青空あおぞらに紛まぎれるばかりじゃ。おれは余りのいじらしさに、慰なぐさめてやりたいと思おもうたから、そつと後うしろ手てに抱だき起たちそうとした。するとあの女はどうしたと思

う？ いきなりおれをはり倒したのじゃ。おれは目が眩くららみながら、仰あおむ向けにそこへ倒れてしもうた。おれの肉身に宿らせ給う、
諸しよぶつ仏 諸しよぼさつ菩薩 諸しよみ明 王おうも、あれには驚かれたに相違ない。し
かしやつと起き上つて見ると、あの女はもう村の方へ、すごすご
歩いて行く所じやつた。何、おれをはり倒した訳か？ それはあ
の女に聞いたが好よい。が、事によると人ひと気はなし、凌りようぜられると
でも思つたかも知れぬ。」

五

わたしは御主人とその翌日、この島の火山へ登りました。それ

から一月ほど御側おそばにいた後のち、御名残り惜しい思いをしながら、もう一度都へ帰つて来ました。「見せばやなわれを思わむ友もがな磯いそのとまやの柴しばの庵いおりを」——これが御形見おかたみに頂いた歌です。俊しゅん寛かん様はやはり今でも、あの離れ島の笹葺ささぶきの家に、相不あいかわらず変御一人悠々と、御暮らしになつてゐる事でしょう。事によると今夜あたりは、琉球りゅうきゅう芋いもを召し上りながら、御仏みほとけの事や天下の事を御考えになつてゐるかも知れません。そう云う御話はこのほかにも、まだいろいろ伺つてあるのですが、それはまたいつか申し上げましょう。

(大正十年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「中央公論」

1922（大正11）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2012年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

俊寛

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>